

メールにおける日本語学習者のスピーチスタイル

—「ません」と「ないです」の使い分け—

岡崎 渉・稲吉真子¹・蘇 振軍¹・谷口愛保¹・永田良太
(2014年10月2日受理)

Email Speech Style of Japanese Learners:
The Differential Use of "Masen" and "Naidesu"

Wataru Okazaki, Mako Inayoshi, Zhenjun Su, Miho Taniguchi and Ryota Nagata

Abstract: Both “masen” and “naidesu” are the polite negative ending forms of a Japanese sentence. However, native speakers of Japanese will adjust accordingly between the two words depending on formality, part of speech used and medium chosen. Nonetheless, differences in usage are hardly taught in the classroom. Moreover, Japanese textbooks for learners usually introduce one of the two forms in each part of speech. From this, a question arises: How do Japanese learners distinguish between these two forms? This research investigates the different usages of the two Japanese negative forms “masen” and “naidesu” by Japanese learners. Advanced-level Japanese learners in Japan were asked to fill in the blanks of two questionnaires. The setting was to write an email to their teacher and a senior who was one year older than themselves respectively. The results show that learners tend to make different use of the two forms with regard to hierarchal relations with whom they write to and the part of speech conjugated just like native speakers of Japanese. However, some learners only wrote “naidesu” after *I*-adjectives, while some others did not seem to use the two forms separately according to hierarchal relations. The results indicate that those learners did not have a definite distinction between the two forms unlike Japanese natives. Previous research has indicated that Japanese natives use “naidesu” frequently in spoken language, especially with *I*-adjectives. This research, on the other hand, shows that the natives avoid “naidesu” even with *I*-adjectives when they write emails to their seniors. In conclusion, the importance to teach Japanese learners the difference in usage between “masen” and “naidesu” is asserted in this research.

Key words: “masen” and “naidesu”, Japanese learners, Japanese in e-mail

キーワード: 「ません」と「ないです」, 日本語学習者, メール日本語

1. はじめに

現代日本語において「ません」と「ないです」は共に広く使われている文末のスピーチスタイルである。両形式は同じ丁寧体であることから、日本語教育において両形式の使い分けは特に指導がなされず、教科書でも品詞ごとにいずれか一方が使われる場合

が多い。しかしながら、日本語母語話者(以下、日本人)を対象とした使用実態調査では、場面や接続される品詞、表現媒体等によって両形式の選択傾向が異なることが報告されている(田野村, 1994; 福島・上原, 2001, 2003; 野田, 2004; 小林, 2005; 川口, 2006, 2010; Uehara & Fukushima, 2008; Hudson, 2008; 池田他, 2010; 坂野, 2012)。これらの調査結果からは、日本人が両形式をランダムにではなく、語用論的に使い分けられていることが窺える。一方で日本語学習者(以下、学

¹広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

習者)が「ません」と「ないです」を、特に書き言葉においてどのように使い分けているのかはわかっていない。日本人が両形式を語用論的に使い分けているのなら、日本語指導にあたる者は、それぞれの形式が学習者にいつ、どのように用いられる傾向にあるのか、それは日本人とどのような相違点をもつのかを把握しておく必要があるだろう。

そこで本研究では、日本在住である上級以上の学習者が、メールの文章において「ません」と「ないです」をどのように使い分けているのか、その使用実態を調査する。その結果を踏まえ、日本語教育において両形式をどのように扱うべきかについての示唆を与えたい。

2. 先行研究

2.1 現代日本語における「ません」と「ないです」

丁寧否定形としての「ないです」という形式は比較的新しく、時枝(1950)や寺村(1984)に記述は見られるものの、規範はあくまで「ません」であり、注釈として「ないです」が用いられることもあるという記述が見られるのみであった。後に、一般的な形式は「ません」だが、「ないです」が用いられることも多いと併記されるようになっており(日本語記述文法研究会, 2003)、両形式の使用が通時的に変化していることが窺える。

コーパスを用いて両形式の使用実態を調査した田野村(1994)や福島・上原(2003)は「ません」の使用が非常に多いことを報告しているが、用いたデータは新聞や小説に限定されている。自然会話を対象とした野田(2004)や小林(2005)では、「ないです」の使用比率が「ません」を上回っており、特にイ形容詞と名詞に接続される場合に多いことが報告されている。坂野(2012)は、『国会議事録』『Yahoo!知恵袋』『書籍』での使用を比較した結果、両形式の使い分けは「話し言葉」「書き言葉」というジャンルの違いよりも、「改まり度」の違いによることを示唆している。これは先行研究において、「ません」のほうが「改まり度」が高いこと(福島・上原, 2001)や、規範的な形としての意識が高いこと(野田, 2004)、「ないです」は「ません」より丁寧さ、フォーマルさの低減する文脈で用いられる(Uehara & Fukushima, 2008)との指摘とも重なる。

両形式の使用を文法的な規範意識の面から調査したものに川口(2006)がある。川口は大学生を対象にアンケート調査を実施した結果、イ形容詞(「おそらくありません/ないです」「おそらくありませんでした/なかったです」)の場合は、「ません」形、「ない

です」形ともに正しい言い方であると回答した者が多数を占めており、「ないです」形も規範として受け入れられているとしている。一方、動詞の場合は、「ないです」形(「書かないです」「書かなかったです」)を正しい言い方であると回答した者は5割程度であり、規範としては依然「ません」のみが受け入れられているとしている。

以上を総括すると、「ません」「ないです」はランダムに選択されているわけではなく、改まりの度合いや前接する品詞、表現媒体などにより、使い分けられていると言える。

2.2 日本語教育における「ません」と「ないです」

では、日本語教育において両形式はどのように扱われているのだろうか。初級日本語教科書を調査した小林(2005)、池田他(2010)によると、前接する品詞が動詞、名詞、ナ形容詞の場合、ほとんどの教科書が「ません」のみを扱っており、イ形容詞の場合に限り、「ないです」のみ、或いは両形式を併記しているものが大半であったという。小林(2005)は日本人の使用実態を調査した上で、「ないです」はイ形容詞以外の品詞の場合にも可能であることを初級レベルから提示すべきであると主張している。

学習者の「ません」「ないです」について調査を行ったのは川口(2006)のみである。川口(2006)は、日本に2年以上滞在している上級学習者(留学生)を対象に、各品詞に「ません」「ないです」が接続された形が正しいかどうか、日頃使うかどうかを問うアンケート調査を実施した。その結果、イ形容詞の「ません」形(「おそらくありません」「おそらくありませんでした」)を、間違いであり、日頃使わないと回答した者が約半数を占めていた。これは、両形式とも正しい言い方であると多数が回答した日本人とは大きく異なる。また川口(2006)では、学習者と日本人の話し合い談話を分析したところ、動詞の場合、初・中級学習者はほぼ「ません」のみを使用していたが、上級学習者は「ないです」が7割以上を占めていたことが報告されている。初・中級では教科書の影響がうかがえるものの、上級になると日本人の使用傾向に近くなることが示唆されている。

しかしながらそれは話し言葉の場合であり、書き言葉でも同様のことが言えるかどうかは明らかにされていない。田野村(1994)や坂野(2012)等の調査結果では、口語的でない書き言葉の場合、日本人は話し言葉と違い、「ません」を優位に用いている。では、学習者の場合、書き言葉における両形式の選択傾向は話し言葉とは異なるのだろうか。また、それは日本人と異なるのだろうか。書き言葉の場合、話し言葉とは異なり、

バラ言語情報や、表情、しぐさといった言語以外の伝達手段をもたないため、言語形式の選択は相手に与える印象を大きく左右すると思われる。同じ丁寧体ということもあり、両形式の使い分けは日本語教育において一般に指導がなされないが、コミュニケーション上問題になりうるのであれば、日本語指導にあたる者はその実態を把握し、指導へと反映させる必要があろう。

2.3 研究課題

以上をふまえ、本研究では、日常的に用いる機会の多い書き言葉としてメールの文章をデータに用いる。そして、国内在住の上級学習者はメールにおいて「ません」と「ないです」をどのように使っているのかを、日本人との比較を通して明らかにする。

3. データ

3.1 方法

本研究では、同じ条件下での両形式の選択を、日本人と学習者間で比較するため、空欄補充課題を用いた(本節末尾に教示文、及び課題文の一部を抜粋する)。両形式の選択は、前接される品詞によって傾向が異なる(野田, 2004; 小林, 2005; 坂野, 2012, 等)ことから、本研究では、動詞の現在形と過去形、イ形容詞の現在形と過去形、名詞、モダリティの計6種類を対象とした。そして、各品詞において、日常的に使用頻度が高いと思われる語を選定した。

次に、課題の形式として、文脈を提示しない単文での提示による設問は、回答者によって想起される文脈にばらつきが生じ、両形式の選択に影響を及ぼすことが考えられる。よって、メールの用件、および本文を提示することで文脈を統制した。並びに、学生が日常的に経験し得る用件を設定することで、より現実の使用場面に近づけた。各品詞2つずつの空欄を品詞の直後に設けるとともに(但し、イ形容詞の過去形のみ3つ)、課題の意図を察せられないようにするためのフィルターとなる空欄を8つ設けた。また、相手との関係が両形式の使用に影響を及ぼす可能性が考えられることから、メールを出す相手を、共に親しい間柄である指導教員の「先生」と、一学年上の「先輩」の2種類とし、文面は両者間で可能な限り同一とした¹⁾。

課題はメールで通知し、回答はメールに埋め込まれたアンケートフォームもしくはリンク先のアンケートフォームで行ってもらった。但し、「先生」と「先輩」を立て続けに行うことによる影響を防ぐため、一方の回答が提出された後、一週間ほど間隔を空けてからもう一方への回答依頼を行った。さらに、課題を行う順序による影響を防ぐため、日本人、学習者それぞれ半

数が「先生」を、もう半数が「先輩」を先に行うように配した。また、学習者には調査終了後フォローアップインタビューを行い、「ません」と「ないです」を普段どのように使い分けているか、両形式にはどのような違いがあると思うかを質問した。

空欄補充課題(一部抜粋)

教示文

あなたは冬休みに短期留学でアメリカに行き、帰ってきました。[先生/先輩]から感想を尋ねるメールが来ました。

課題文(4)

先日あなたの専門に関する学会が開かれました。[先生/先輩]からその学会に行ったかどうか聞かれました。

「体調があまり良くなかったので、結局、行()。今回は必ず行()と思います。」

課題文(7)

あなたは冬休みに短期留学でアメリカに行き、帰ってきました。[先生/先輩]から感想を尋ねるメールが来ました。

「北部や内陸のほうは雪も降っていましたが、アリゾナは南部で乾燥しているせいかあまり寒く()。日本に帰ってから、あまりに寒()ので風邪をひきました。」

3.2 調査協力者

調査協力者は、共に20歳代である日本人21名および中国語を母語とする日本在住の上級学習者17名であった。調査協力者のうち、日本人は社会人、大学院生、大学3、4年生からなり、平均年齢は約25歳であった。学習者は社会人、大学院生、大学院の研究生からなり、平均年齢は約26歳であった。全員が教室環境で日本語を学習した経験をもっており、且つ日本語能力試験N1(ないし旧1級)を取得している。学習者を中国語母語話者に限定したのは、学習者数が多いことに加え、中国語では通常文法的な待遇表現の使い分けが行われないことから、本調査への母語の影響を最小限に止められると考えたためである。

4. 結果と考察

4.1 全体の傾向

得られた回答は、「ません」もしくは「ないです」が含まれている記述のみを集計対象とした。即ち、「ま

せん」「ないです」がもう一方と交換可能でないもの、品詞や時制が設問の求めている回答となっていないものは除外した²。項目別の集計結果を次項表1に示す。表1の数値を品詞別に「ません」「ないです」の使用比率で表したものを次項図1に示す。なお、動詞と形容詞の時制による違いについては、学習者の正答数が少ない項目もあったため、以降、時制による区別は行わず、品詞ごとに一括して扱う。

まず、日本人の結果を概観すると、「対先生」は、すべての項目で「ないです」がほとんど選択されていないことがわかる。それに対して「対先輩」では「ないです」が、特にイ形容詞において多く選択されている。

次に、学習者の結果について、「対先生」は、先生に対する日本人よりも「ないです」が多く選択されているものの、品詞別に見た場合、イ形容詞に集中していることがわかる。「対先輩」の場合にも、全体的に「ないです」が増えており、特にイ形容詞、名詞では「ないです」が「ません」を上回っている。先輩に対しては、品詞ごとの使用比率が日本人と学習者間で近似しているのも特徴的である。

野田(2004)、小林(2005)では、日本人は職場というフォーマルな場面での会話であっても「ないです」の使用が「ません」を上回っていたことが報告されている。しかしながら、メールの文章を対象とした本データにおいて日本人は、先生に対してほぼ「ません」のみを選択していることから、両形式は、イ形容詞であっても明確に使い分けが行われていることがわかる。一方、学習者は、先生であっても「ないです」の使用

が、特にイ形容詞で見られる点が日本人とは異なっている。学習者は全体的に以上のような傾向が見られるが、使用傾向をより詳細に探るため、次節で学習者の回答を個人別に分析する。

4.2 学習者の個人別の特徴

学習者は日本人と異なり、「対先生」の場合にも「ないです」を用いる傾向が見られた。では、そのような使用傾向はどの程度の学習者に見られるのであろうか。「ないです」が集中的に見られたイ形容詞の5つの項目において、「対先生」、「対先輩」を問わず「ないです」のみを用いて回答している学習者の数を調べたところ、5名が該当した。川口(2006)の実施したアンケート調査において、イ形容詞の「ません」形は、滞日歴2年以上の上級学習者であっても約半数が「間違い」であり、「普段使わない」と回答していることを考えると、この5名はイ形容詞の否定形を産出する際に、相手との社会的関係によって「ません」か「ないです」のいずれかを選択するというよりも、そもそも「ません」を使用の候補として捉えていない可能性が考えられる。

次に、学習者は両形式を相手との社会的関係に応じて使い分けしているかどうかを確かめるため、同じ項目への回答で、先生には「ないです」、先輩には「ません」で回答している者がいないか調べたところ、2名が該当した。この2名は他の項目では、先生に「ません」、先輩に「ないです」で回答している箇所も見られたが、日本人の場合、先生に「ないです」、先輩に「ません」を用いている回答が一例も見られなかったことを考えると、相手との社会的関係による使い分けの意識は、

表1 日本人、学習者の項目別「ません」「ないです」選択状況*

日本人					学習者			
対先生		対先輩			対先生		対先輩	
ません	ないです	ません	ないです		ません	ないです	ません	ないです
8	1	12	2	①動詞(使う)	8	1	9	3
15	1	15	4	②動詞(いる)	9	2	13	2
8	0	8	4	⑤動詞過去(行く)	3	0	3	2
15	0	10	7	⑨動詞過去(わかる)	10	0	6	1
16	1	8	13	⑩イ形容詞(多い)	6	2	4	8
16	1	5	12	⑪イ形容詞(良い)	7	6	2	8
13	0	9	10	⑧イ形容詞過去形(難しい)	5	1	2	5
13	1	7	10	⑬イ形容詞過去形(寒い)	3	7	1	4
14	2	3	14	⑱イ形容詞過去形(おいしい)	5	6	2	9
13	0	7	4	③名詞(自動車通学)	3	2	1	3
14	2	8	6	⑫名詞(母語)	10	2	4	7
18	2	14	6	⑫モダリティ(かもしれない)	16	1	14	1
21	0	11	3	⑮モダリティ(なければならない)	14	1	10	5
184	11	117	95	合計	99	31	71	58

*各項目の丸数字は、課題中の回答欄の番号を指す。

メールにおける日本語学習者のスピーチスタイル
 —「ません」と「ないです」の使い分け—

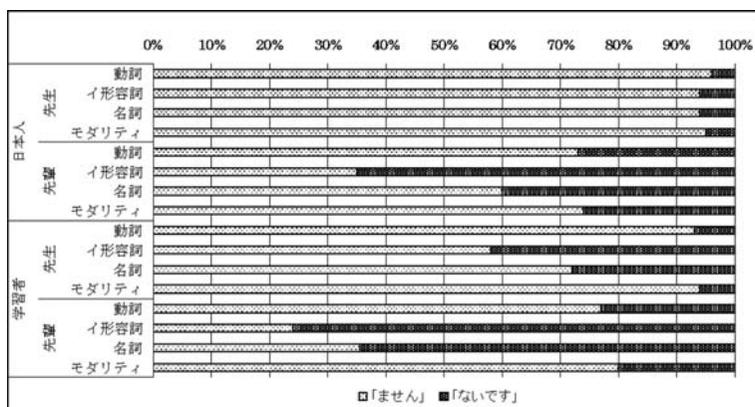


図1 日本人、学習者の品詞別「ません」「ないです」使用比率

日本人よりも希薄であると考えられる。

上記の結果を、学習者に対して行ったフォローアップインタビューの結果と合わせて考察する。まず、イ形容詞において先生、先輩にかかわらず「ないです」のみを用いていた学習者5名のうち、ある学習者は「両形式にどのような違いがあるのかよくわからない」と答えており、別の学習者は「ません」をニュース報道や接客場面、会議などのフォーマルな制度的場面において用いられる形式であると答えていた。

また、先生には「ないです」を、先輩には「ません」を使うと回答していた2名について、1名は「「ません」は冷たく聞こえ、「ないです」のほうが丁寧」であると答えており、もう1名は、「「ません」はよそよそしい感じがするため事務的な連絡に使われ、個人間でのメールのやりとりには「ないです」が用いられるように思う」と答えていた。

以上の個人別の分析、及びフォローアップインタビューの結果から、日本人とは異なる使い方をしてきた学習者は、両形式の違いをよく理解していなかったり、誤って理解していたりすることが示された。学習者はいずれも日本に居住しているが、日常生活を通して得られるインプットからのみでは、「ません」「ないです」の使い分けを習得するのは容易ではないと言えるだろう。

5. まとめと今後の課題

本研究では、日本国内在住の上級学習者はメールにおいて「ません」と「ないです」をどのように使い分けているのかを調査した。その結果、学習者は、概ね相手との社会的上下関係に応じて両形式を使い分けている点、及び品詞間の使い分けを行っているという点で、平均的には日本人の使用傾向と近似しているこ

とがわかった。但し、相手が先生の場合であってもイ形容詞に「ないです」のみを使用、或いは多用する学習者も見られた。また、「ません」と「ないです」の語用論的な違いをよく理解していない学習者も見られた。これには、イ形容詞の「ません」形が、初級教科書においてほとんど扱われていないこと(小林, 2005; 池田他, 2010)や、日本人の日常会話では「ないです」が優位に使われていること(野田, 2004; 小林, 2005)が影響しているものと思われる。だが本研究のデータが示しているように、日本人はイ形容詞であっても「ないです」の使用を回避する場合もある。「ないです」の優位性は通時的に強まっている(野田, 2004: 242)とはいえ、両形式は品詞を問わず、表現媒体や相手との社会的関係による語用論的な使い分けが行われていることを、日本語指導にあたる者は留意しておくべきであろう。

今後の課題として、本調査に用いた穴埋め式の空欄補充テストが、文末形式を記述させるという性格上、回答の自由度が高くなり、除外せざるを得なかった回答の多かった点が挙げられる。その結果、データ量が十分とは言えない項目も見られた。また、各品詞で選定した語の性質や、設定した文脈が両形式の選択に影響を及ぼした可能性も否めない。この点について、今後、他の調査方法を併せて用いるとともに、他の言語を母語とする学習者のデータも加え、本研究の結論を検証、発展させていく必要がある。

さらに、日本人の回答のうち、特に社会人の被調査者には「ません」「ないです」以外の、よりフォーマルな形式や、言い切らない形式で回答した例が多くみられた。本研究では、「ません」と「ないです」に焦点を当て、分析・考察を行ったが、実際の言語使用場面に即して考えれば、これらの形式以外の表現も考慮に入れる必要がある。今後は、会話・文章における

スピーチスタイルのバリエーションという、より大きな枠組みの中で、「ません」と「ないです」の使い分けを検討していく必要があると考える。

【注】

1. 例えば、「先生」に授業の感想を答えるという設問の場合、「先輩」に対しては、先輩の研究発表への感想を答えるという内容に修正した。
2. 除外した回答は、①「ないんです」「ないと思います」などの、もう一方の形式と交換できない場合、②イ形容詞過去形を問う「難しく()。」「おもしろく()。」「面白くありません／ないです」のように、異なる品詞に接続されている場合、③過去形を問う「寒く()。」「暑くありません／ないです」のように、時制が設問の求めている回答になっていない場合などである。除外された回答は、学習者の場合、全回答の約半数に上った。また、設問によっては日本人、学習者ともに大半の回答が除外となった項目もあり、今後改善すべき点である。

【参考文献】

- 池田庸子・坂野永理・渡嘉敷恭子・品川恭子・大野裕 (2010) 「トーク番組に見られる否定形「ないです」の使用」『世界日本語教育大会論文集』(CD-ROM).
- 川口良 (2006) 「母語話者の「規範のゆれ」が非母語話者の日本語能力に及ぼす影響—動詞否定丁寧形「(書き)ません」と「(書か)ないです」の選択傾向を例として—」『日本語教育』129号, pp.11-20.
- 川口良 (2010) 「「ません」形から「ないです」形へのシフトに関わる要因について—動詞否定丁寧形の言語変化という視点から—」『日本語教育』144号,

pp.121-132.

- 小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」『日本語教育』125号, pp.9-17.
- 田野村忠温 (1994) 「丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査—「～ません」と「～ないです」—」『大阪外国語大学論集』11号, pp.51-66.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法口語篇』岩波書店.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版.
- 野田春美 (2004) 「否定ていねい形「ません」と「ないです」の使用に関わる要因—用例調査と若年層アンケート調査に基づいて—」『計量国語学』24号5巻, pp.228-244.
- 坂野永理 (2012) 「コーパスを使った述語否定形「ません」と「ないです」の使用実態調査」『留学生教育』17号, pp.133-140.
- 福島悦子・上原聡 (2001) 「現代日本語における丁寧体否定形式」『東北大学留学生センター紀要』5号, pp.11-17.
- 福島悦子・上原聡 (2003) 「日本語の丁寧体否定辞二形式に関する通時的研究—テキスト分析によるケーススタディー—」『国際文化研究科論集』11号, pp.79-8.
- Hudson, E. M. (2008). Riyuu 'reason' for nai desu and other semi-polite forms. In Kimberly, J. and Ono, T. (eds.), *Style Shifting in Japanese*, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 131-160.
- Uehara, S. & Fukushima, E. (2008). *Masen or nai desu* - That is the question: A case study into Japanese conversational discourse. In Kimberly, J. and Ono, T. (eds.), *Style Shifting in Japanese*, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 161-184.